流氷の海に女工節が聴える

田一道

新潮社

合田一道（ごうだ・かずみち）
＊1934年　北海道空知郡上砂川町生れ
＊北海道新聞記者を経て，現在北海道文化放送編成部長
＊日本放送作家協会員／北海道史研究協議会員
＊著書　『北海道祭りの旅』（北海道新聞社）
『死の逃避行』（富士書苑）『夕陽と青春』
（恒友出版）『函館大火』（恒友出版）ほか
＊1980年　「定山坊・行方不明の謎」で第一回北海道
ノンフィクション賞を受賞
＊現住所　札幌市白石区栄通16丁目795—251

流氷の海に女工節が聴える
昭和五五年八月一五日印刷
昭和五五年八月二〇日発行
著　者　合田一道
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03—二六六—五一一一
（編集部）03—二六六—五四一一
振替東京四—八〇八
印刷　三晃印刷株式会社
製本　神田加藤製本株式会社
定価　九八〇円

© 1980, Kazumichi Gōda
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

流氷の海に女工節が聴える　目次

第一章　北の海の哀歌……7
初めて聴いた女工節　カニ缶詰のふるさと　哀しみの海
重村ナミさんの執念　女工節はなぜ生まれたか

第二章　カニ缶企業の変遷……42
缶詰企業のウブ声　碓氷勝三郎と和泉庄蔵の苦闘　樺太と北千島のカニ缶　必要に迫られた女子労働者　カニ工船の進出と生産制限　カニ工船と陸上・輸出業者の対立　沿岸漁民とカニ缶業者の対立

第三章　国後、択捉の生活……80
カニ缶女工は、いま……　根室への旅　林田トリさんの証言
谷内イマさんの証言　国後島から持ち帰られたご神体　中家菊蔵、きよせ夫妻の述懐

第四章　埋もれた青春……115
木村はなという女　女工海峡を渡る　島から島へ……　哀しい恋のはてに　木村はなの故郷は

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

第五章　フィルムの中の女たち……149
古釜布カニ缶工場の活動写真ロケ　無声映画の女工たち　名声を高めた缶詰のレッテル　また見つかった元女工
第六章　敗戦——戦後の混迷と模索……182
沈没した浦河丸と女工たち　択捉へ向かった女工の謎　敗戦——失った故郷　北方四島の返還は……　まかり通る拿捕
第七章　望郷のノサップ岬……223
戦後の復興と新女工の誕生　カニ缶工場の今日　いま〝望郷の歌〟となって　ノサップ岬に立って
*
参考文献　264
あとがき　265

流氷の海に女工節が聴える

第一章　北の海の哀歌

初めて聴いた女工節

新聞記者の忘年会は毎年けたはずれに早い。暮れになると、一年の回顧記事や、新年にふさわしい話題捜しに目が回るほど忙しくなるので、早いうちに〝結着〟をつけてしまおう、という算段である。

その年もそうだった。初雪が降って間もない十一月半ば過ぎ、どうも気分がでないなあ、などとぶつぶつ言いながら、無礼講の忘年会を催したのである。

当時私は、北海道の東部、釧路で事件記者をしていた。編集局報道部の部長以下デスク、記者、カメラマンが一堂に会するのは、一年のうちこの時くらいのものである。

男ばかりの、騒々しいだけのパーティーだった。なみなみとコップ酒がつがれ、そいつを冷やでぐいぐいあおるのである。一升びんが何本か、たちまちからになる。怖いほどの勢いといおうか。そして酔いにまかせて歌いはしゃぎ、日頃のウサを一気に晴らすのだ。この夜ばかりは、部長もデスクもなかった。

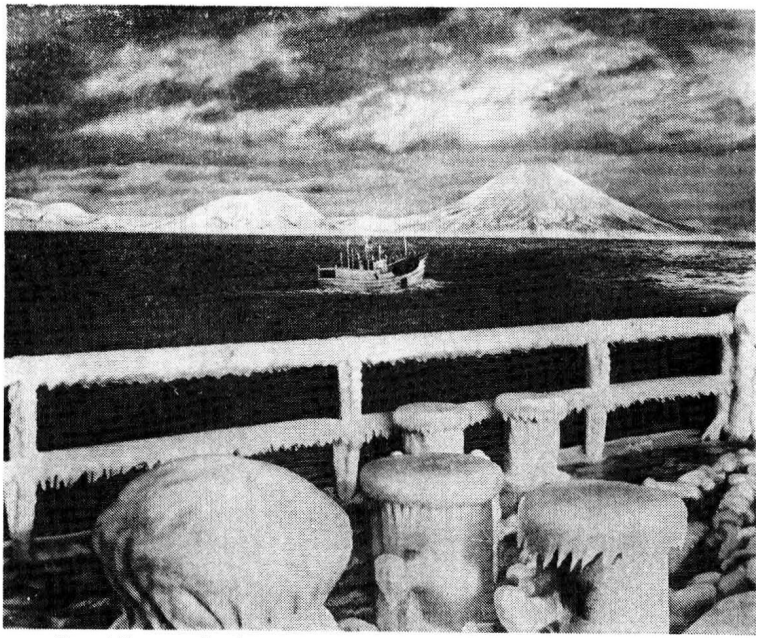
その席で、初めて哀調切々たる「女工節」を聴かされたのだった。根室支局から転勤してきたばかりの忠沢保孔（ちゅうざわやすお）記者が立ちあがり、巨軀を揺すって歌った。この座には、場違いな感じの歌だったから、急にしゅんと静まり返った。

女工女工と軽蔑するな
女工さんの詰めたる缶詰は
横浜検査に合格し
アラ　女工さんの手柄は外国までも

「へえ、何ていう歌なの、その歌……」
「女工節といって、昔、国後や歯舞諸島の島々で歌われていた、ということです。いまは根室で歌い継がれているくらいですが、知ってる方はあまりいないようです。根室に着任して真先に覚えたので、私の愛唱歌にしてるんです」
彼は巨体に似合わぬ柔和な表情を崩すと、やや得意気に笑った。
根室や釧路は、北海道では〝道東〟という地域に属する。根釧原野が茫漠と広がり、このあたりを指して釧根地方と、ひとまとめに呼ぶ。
距離的にみても釧路—根室間約百四十キロ。急行列車で二時間そこそこのところだ。そのわずかなへだたりの街に住んでいて、こんな歌を耳にしたことさえなかったのだった。
先輩の記者連中にも「女工節」を初めて聴いた人が多かったらしく、盛んにアンコールの声が飛んだ。彼は、二度、三度立っていくつかの歌詞を披露に及んだ。今度はいささか艶っぽいのを選んだせいか、座が急になごんだ。

ゆうべおかしかった　笑えばよかった
ネコがたんぜん着て　ニャオニャオと

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c



厳しい表情をみせる北の島々（巡視船「つがる」から）

いくらひらけた工場でも
アラ　ネコがたんぜん着てくるもの
か

手拍子が響き、ネコがたんぜん着てニャオニャオと……のあたりで、どっと爆笑が沸いた。一段と手拍子が強まり、歌声が弾んだ。

でも、歌のもつ独得な旋律に、ぬぐえぬ翳りがのぞいていた。喜びも哀しみも、すべてを押し包んだまま、深い淵に喰い込んでいくようなイメージ、とでも表現すべきだろうか。

女工――この存在に、興味を抱いた。戦前、根室の歯舞から国後、択捉、色丹島にかけて点在した多くの缶詰工場。ここに働いた女工たちは、数え年十四、五歳の少女から年配の女性までかなりの数にのぼったという。

彼女たちは「女工節」を、ある時は辛い労働のはけ口に、また哀しい恋路の果

てのつら当てに、そして遠い故郷へのいとしさに……といった具合に、その思いを托して歌ったのである。

それにしても「女工節」の歌詞は、すさまじい迫力で胸をえぐる。

缶詰工場に二度くる者は
親のない子か　まま母育ち
親のない子は　泣き泣きかせぐ
アラ　監獄部屋よりまだつらい

缶詰女工がどんな形態で存在したのかはわからない。ただ、うろ覚えに覚えたいくつかの歌詞に、底辺に生きる女の姿を垣間見る思いがした。若い新聞記者時代に受けた鮮烈な印象であった。

いつの日か、この「女工節」に生きた女性を追跡してみたい、と思った。昭和三十四年暮れ近く、もう二十年以上も前の話である。

カニ缶詰のふるさと

昭和三十七、八年頃、北海道新聞の夕刊で毎週一回「百年のふるさと」という企画が連載された。北海道の歴史をテーマごとにひとつひとつひも解いて、一頁の特集記事を組むのである。

六十何回目かだったから、スタートして一年余りたった頃、突然、デスクに呼ばれ「タラバガニのテーマで、百年のふるさとを書くように」と言われた。

札幌本社の記者が中心になって執筆しているが、支社報道部にも順番が回ってくる。今度は釧路が

執筆の担当にぶつかったのである。
「カニ？　なぜ私が……。私は事件担当だし、このところ事件、事件で、とても警察記者クラブをあけて、そんな悠長なことをしていられませんよ」
「だから、たまに息抜きがてら、のんびりカニのふるさと、根室まで行ってこいというんだ」
日頃、恐ろしい剣幕の鬼デスクが、どうした風の吹き回しか、心やさしき女神に変貌している。何のことはない、特集の書けそうな記者に公平に機会を与えて、ひそかにその〝筆力〟をテストしよう、という深謀遠慮であった、などとは気づくよしもない。
事件、事故でもない限り、三日も四日も記者クラブを離れるなど、夢のような話だ。嫉妬とも羨望ともつかぬ周囲の目を避けるようにして、根室へ向かったのだが、実のところ、この取材は気が重かった。カニ缶詰の歴史を捜るのである。のんびり息抜きがてら、とはまいろうはずもない。
しかし、この取材が、後に女工史にかかわっていく伏線になろうとは、夢想だにもしなかったのだった。

根室港の朝は、六月初めだというのに身震いする肌寒さだった。ひどいシケで、鉛色の波が牙をむいて岸壁をたたいている。港内は出港できない漁船で溢れていた。
「また、今日もダメだあ。サクラも散ったのに」
漁業協同組合へ行ったら、黒光りした顔の屈強な中年男性が応対に出て、ぶっきらぼうに答えた。もう三日間もこの調子なのだという。
サクラ前線は丸一カ月かけて北海道をゆっくり横切り、根室の千島ザクラで、北国の花の宴を終えるのだが、その花びらがつい先日散って、いよいよすがすがしい初夏の季節を迎えようとしている。だのにこの寒さとシケ続きでは漁師もたまったものでない。

漁船が出漁しないから、かんじんのタラバガニも揚がろうはずがない。同行のカメラマンはいらいらして、夜も明けないうちから旅館を飛び出し、港へ出かけていくのだが、やがて気落ちして戻ってくる。

嘆き悲しんだ末、たった一枚のメイン写真を撮影できたのは、根室に入って四日目の朝だった。

その時、初めてタラバガニの水揚げを見た。ミルク色の淡い海霧をついて、カニ漁船が一隻、二隻、と岸壁に近づいてくる。色とりどりのネッカチーフをかぶった若い女性が寒風に頬を真っ赤に染めて待っていた。

かすりの作業衣にゴム前掛け、ゴム手袋をした女性たちは船が近づくと、それまで浜言葉まる出しでおしゃべりしていたのをやめて船に声をかける。

「だいりょう（大漁）だかよお」

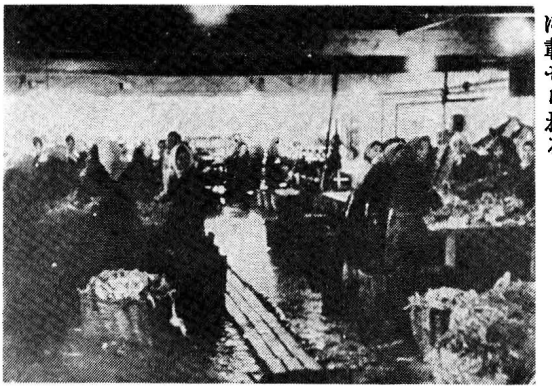
「んだ。だいりょうだぞお」

黒いゴム合羽で全身を覆ったたくましい乗組員が船上から答える。スピーカーから流れる流行歌が、一段とボリュームを上げ、景気をあおった。

網が下ろされると、三、四十センチくらいの間隔でタラバガニがぞろぞろと出てくる。網に脚をからませたカニを、女性たちは鼻歌まじりにひっかけカギを使って巧みにはずし、無造作に足元のたきにポーンと投げ出す。足を延ばすと軽く一メートルもあるカニがスローモーションのようにうごめく。それを男性作業員が拾って、つぎつぎにカゴに入れる。たちまちカゴは一杯。

どっと水揚げされるタラバガニ

そのカゴを満載したトラックが、車体を揺さぶって、岸壁伝いにカニ缶工場へ走って行く。
車の後を追って、カニ缶工場へ向かった。岸壁のつい目と鼻の先に、カニ缶工場がずらりと並んでいた。高い煙突から黒い煙がもくもくと立ち昇っている。
工場の中は戦場のような慌しさだった。生ぬるいべたつく感じの空気が工場内によどんでいる。吹き上がる湯気の陰から、たったいま水揚げされたタラバガニが、真っ赤に茹でられて威勢よく調理台に載せられる。



タラバガニの缶詰工場は戦場のような慌しさ

ネッカチーフにゴム前掛けの女工さんが、器用な手さばきで大きなタラバガニを、スパッ、スパッと切っていく。切られた脚が、さらに三つに切断され、たちまち皮が剝かれる。
輸出用の一等缶、二等缶、それに三等、四等、くず缶などが、見事なほど素早く造られていく。缶に詰められるまでは、すべて女工さんの手作業だ。
賑々しいまでの流行歌がバックミュージックになって、軽快に作業が続いていく。若い女性ばかりの溢るるばかりの熱気であった。
昼、きっかりにベルが鳴った。と同時に、機械がぴたっと止まり、女工さんたちは一斉に仕事の手を休めて休憩所へ向かう。持ってきた弁当をひろげて、談笑しながら食べる。屈託のない明るい話しぶりだ。
午後一時、再開のベル。工場はまた賑々しい活気に満ち溢れる——。

その夜、取材を終え、ほっとした気持ちで根室の記者連と一緒に街へ出かけた。小料理店に上がり込んだらカニ料理が出た。それを肴に熱カンを飲んだ。

年配のお内儀が出てきて、ようこそと丁寧に挨拶する。小肥りで首が少し曲がっている。

「カニのことを調べに来たんだそうですね。カニはやっぱりタラバですわ」

「まったく……。おいしいねえ、タラバは……」

と相づちを打ったら、お内儀は膝を乗り出して、

「わたしゃ、カニを見るたびにいまも思い出すんです。昔のことが……。ええ、若い頃のことですけど、国後の島でカニ場の女工をしてたんですよ」

「へえ、お内儀さん、元女工さんだったの」

「古い古い話ですよ。昭和初めの話だからねえ」

懐かしさを瞳にこめて言った。

「済まないが、女工節……、あれをひとつ聴かしてくれませんか。本場のを……」

「いやあ、わたしゃ、歌は不得手でしてねえ。でも、よくみんなで歌ったものです。歌を歌うことが生きがいみたいな時代でしたからねえ。ひとつやりますか」

そう言うと、自ら手拍子を打ちながら、歌い始めた。

朝は早くから　起こされて
夜は遅くまで　夜業する
足がだるいやら　眠いやら
アラ　思えば工場が嫌になる

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c